

5-4 44 災と大町ダム

北アルプスの山々から流れ出す高瀬川は、大町市街を貫くように流れているため、大昔から何度も大きな洪水を引き起こし、農地や建物、人命に多くの被害を与えてきました。特に1969（昭和44）年8月の集中豪雨による高瀬川の大洪水は、「44 災」と呼ばれ流域に大きな被害をもたらしました。

■ 上流での豪雨がもたらした大水害

昭和44年の8月、高瀬川流域では毎日のように雨が降り続き、特に8月11日は一段と強く降っていました。その時上流の沢では、実に数百ミリという豪雨となっていました。

その豪雨がもたらした川の水は、11日に最大700トンという膨大な流量となりました。高瀬川の上流域の葛温泉では、旅館の建物2棟が流出、1棟が土砂に埋没しました。大町市、松川村をはじめ高瀬川下流では次々に堤防が決壊し、家屋約1,000戸が浸水し、水田約720ヘクタールが流されたり、土砂に埋まるなどの被害が発生しました。

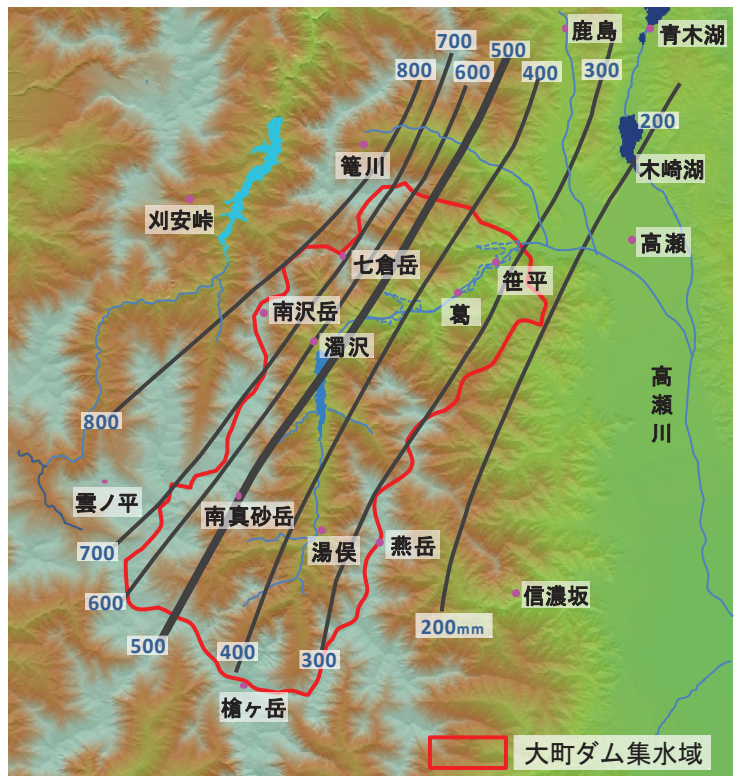


図 5.8 昭和44年8月7日～12日の流域周辺のひとあめ雨量分布図

■ 気象データから読み取る44 災

当時の気象データをもとに44 災をみてみます。昭和44年8月7日～12日の間に停滞前線がもたらした雨は、北アルプスの南沢岳、七倉岳で700～800mmとなり（図5.8より）、前線が2日に渡り本州上に停滞していた状況（図5.9）も読み取ることができます。これらの大量の雨を集めた高瀬川の水深は、高瀬上橋の地点で3mを越えました。大町市内の水田は、233.6haにわたって流失、埋没、冠水などの被害を受けました。

災害の直接の原因は大雨ですが、高瀬川流域が崩れやすい地質であること、急流でV字谷であることなどが重なって、いっそう被害を大きくしたといわれています。



(昭和44年8月14日 大系タイムス)



災害前の葛温泉



災害後の葛温泉

写真 5.8 災害前後の葛温泉（吊橋付近）の様子

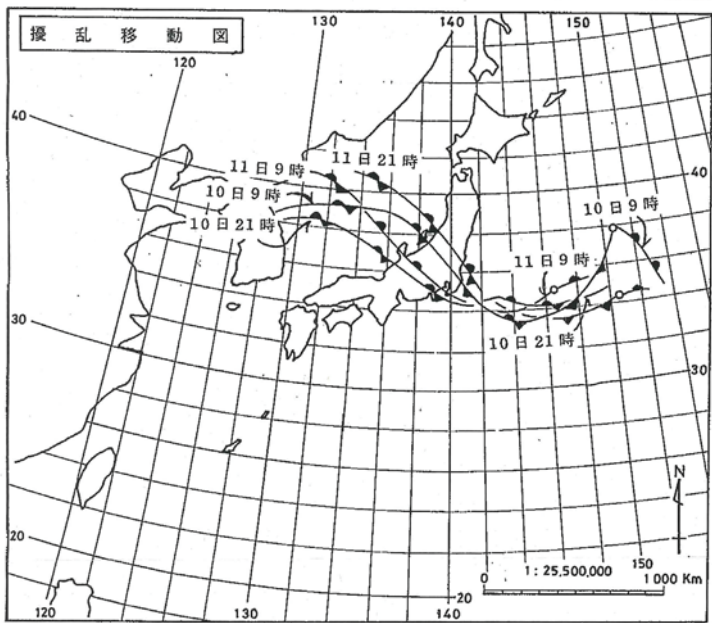


図 5.9 昭和 44 年 8 月 10 日～11 日の擾乱移動図

■ 大町ダム建設へ

高瀬川流域は、昔から何度も大きな洪水に見舞われてきました。特に、昭和 30 年代とその前後で頻繁に大きな災害が発生していました。これらの水害を受け、大町ダム建設に向けた調査が昭和 42 年から開始されました。調査開始から 2 年、前述の未曾有の災害「44 災」が発生しました。多大な被害をもたらしたこの災害を機に大町ダム建設計画が推進され、昭和 49 年に建設に着手し、昭和 61 年 3 月に竣工しました。



写真 5.9 大町ダム建設前後の高瀬渓谷の様子

【コラム】

『湖水誕生』から読み取る 44 災

44 災については、『湖水誕生』の中に当時の状況が描かれています。そこには、高瀬川の川筋は何百年ぶりと言われる洪水に見舞われたこと、約 10 日間降り続いた雨が 8 月 11 日の朝、急に激しくなり、局所的に数百ミリという豪雨となったこと、高瀬川の左岸である北アルプスの裏銀座だけに集中的に降り、下流の大町ではよもやこれほどの集中豪雨となっていたとは想像できなかったことなど、当時の気象状況を含め書かれています。

また、その時の高瀬川は毎秒 560 トンという水量となり、葛温泉は旅館 2 軒が流出する大きな被害を受けたこと、時が経っても流された流木の残骸が恐竜の白骨のように川の中に残っているなど、水害の恐ろしい破壊力や水害後の情景をありありと伝えています。

大町ダムの役割

大町ダムではこれまで渇水や洪水などの被害から、下流住民の方々のくらしを守るために様々な役割を果たしてきました。

渇水に対しては、平成 6 年に全国で渇水が問題となるなか、大町ダムでも 7 月 10 日から 9 月 16 日にかけて、不特定用水と水道水へ累計 760 万トンの補給を行うことで、下流での水不足を解消することができました。また、高瀬川では夏から秋にかけて川の流れが途切れる、「瀬切れ」が問題となっています。大町ダムでは河川の流況を監視し、「瀬切れ」が発生する恐れのある場合には放流を行い、「瀬切れ」の解消に取り組んでいます。

洪水に対しては、これまで多くのダム防災操作（洪水調節）を行い、下流地域の洪水被害軽減に努めてきました。なかでも平成 18 年 7 月 19 日洪水時には、平均雨量が千曲川本川流域 248mm、犀川流域 312mm、大町ダム流域 176mm となる記録的な大雨となり、高瀬川の 3 ダム（高瀬、七倉、大町）及び梓川の 3 ダム（奈川渡、水殿、稲核）の合計 6 ダム連携による特別防災操作を実施し、洪水被害を抑えることができました。

近年では地球温暖化に伴う気温上昇による水蒸気量の増加等の影響により、総降水量が 1,000mm を越える記録的豪雨が全国各地で頻発しています。今後、大町ダムの防災操作による水害の防止や流域住民の防災意識の向上や警戒・避難体制の強化がより一層重要となっています。